

「大口径・超急曲線推進工事の現場見学会」を開催

アルティミット工法協会

当協会の特別会員であるアルティミット工法協会(会長・木村勝彦氏)は、去る9月19日、20日の両日と27日の3日間にわたって「大口径・超急曲線推進工事の現場見学会」を開催した。

現場は、川崎市建設局発注の「渋川雨水貯留管その5工事およびその5付帯第152工事」(川崎市幸区矢上450番地)であり、同工事のうち、近接する渋川ポンプ場でくみ上げた下水を貯留管の立坑側部(バルジ部)までに引き込む流入管(φ2600mm、L=78.57m、R=40m)の埋設にアルティミット泥水工法が採用されたものである。

19日、20日に開催された現場見学会は、両日も1日2回づつのペース開催され、近隣の地方公共団体やコンサルタントの職員等を中心に合計

200余名の参加者を迎え、各回とも大変盛況であった。

また、27日の現場見学会は、日本下水道事業団の研修部において、現在「実施設計コース管きよ専攻」のコースで研修中の研修生(全国各地から集まった地方公共団体の下水道技術者)28名の研修・授業に協力して開催されたものである。

見学会は、冒頭に、アルティミット工法協会を代表して木村会長が挨拶をした後、現場担当者による工事概要の説明、ビデオ放映による同工法の説明と続き、実際の現場見学に移り、見学者は少人数に分けた班ごとに立坑内へ降り、発進後52m附近まで掘進を終えている先導体の後部まで推進管内を徒歩で見学した。



挨拶するアルティミット工法協会・木村会長



施工中の管内を先導体(掘進機)の後部まで公開した

先導体に後続した直後の推進管は、今後通過する予定の曲線区間に対応できるように、長さ400mmの(内側にコンクリートライニングが施された)合成鋼管が採用されており、それぞれの目地には推力伝達材(センプラリング)が装着された状態の区間が約30m程度続いていた。推進管は、それ以降の区間では、長さ2430mmの標準タイプの鉄筋コンクリート推進管が使われていた。見学者は、その他にも安定した曲線推進を支える測量システムや滑材注入装置等に関する各種システムの説明を熱心に聞き入っていた。

見学終了後の質疑応答では、「曲線区間通過時の目地の開きについての考え方」、「土質との適合

性」などの専門的な質問が相次ぎ、参加者にとっては、大変内容の濃い現場見学会となった。

同協会関係者によると、今回、工事発注者である川崎市建設局の深いご理解とご協力により、近隣の地方公共団体やコンサルタントの職員の皆さんに、最先端の技術を駆使した推進工事現場を見ていただくことができ、ある意味では公共に奉仕することができたと考えている。また、多くの参加者の方々に、「大変勉強になった」、「素晴らしい施工技術を見せてくれてありがとう」、「曲線推進技術に大変興味をもった」という声を掛けられたと語っていた。